

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	旭光：新體詩：文苑
Author(s)	天山
Citation	龍南會雜誌， 1 0 5： 2 7 - 2 8
Issue date	1904-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5669
Right	

想ふ、十年の昔、橋上の渠とわれは恐らくば運命の分水嶺に立つてゐたのであらう!! 「をばり」

新體詩

旭 光

たとへばそれようら若き

母の乳房をだきしめて

ちの香に酔へる子の瞳

静に夢に入るがごと

寂しき光沖の上に

やゝに消ゆゆく星の影

またさめ出でひあけぼのゝ

樂しき光もだしつゝ

はてなき空ゆ流れては

いまし下界の岸うちて

無限をさどす浪の音に

朝の聲のこもるかな

天 山

見よ海原の深緑

戀の光の燃ゆるめし

崇高き聖の御胸や

五彩色どるあやのかけ

北にめぐれる紅は

春の夜の夢雨は

迷の色のこひらさき

こやみねそめし裾模様

さびしくされど聲もなき

みことかしてみ夜の魔は

暗と眠と西のそら

諸共領をひきしんぬ

ゆけるをはふる喜か

くるを迎ふか地のさけび

汀の波をすべりさて

ゆるくあしたの鐘響く

よそおひ成りぬ雲錦うんざんの

波はひびいて朝の聲

海のをちなる御都

みくるま早も整へり

あら幾すじの征矢とびぬ

けらくの色を世に投げて

浪ちのはてをゆるやかに

見よ火の車きしりゆく

綾のもすろを射貫いだる

白銀のそやたばさみて

こがねのかむりいんぎ厳しき

朝のみ神仰がすや

空に轟く迅雷の

響はるれよあらずとも

生命いのち救ふる御聲は

波に野山にあふれたり

夕の響衰へて

底に沈みし潮のねよ

いざやさんごの床出で

望の聲に湧きかへれ

岸に淋しき並木松

涼しき朝の風たて

雲のみもすろ吹きなびけ

不絶の緒琴かなでずや

聲なき教身にひめて

汀に朝の息すへば

胸に驕慢手に力

わがき血潮のおどるかな

(寅年夏、虹の松原にて)